

令和 2 年度個別学力検査（前期日程）

地理歴史科・出題意図

1. 日本史問題

【出題の意図】

（Ⅰ）

4 世紀後半から 5 世紀末において、倭国が東アジア諸国・地域といかなる関係にあったのかを問うた。これは必ず日本史の教科書に書かれている事項であるが、古墳時代中期という聞き方をしたため、少し戸惑った生徒もいたかもしれない。しかしリード文で、百舌鳥・古市古墳群の築造年代の中心が古墳時代中期であることを述べており、これが最大のヒントになっている。時期を完全に間違えていた答案もあったが、全体としてはよく解答できていた。

（Ⅱ）

11 世紀後半に東北地方では前九年合戦・後三年合戦が起こり、戦乱により現地の支配権力が変遷した結果、奥州藤原氏の支配が確立するに至る。しかし、その奥州藤原氏も、12 世紀末には源義経をかくまったとして、源頼朝の奥州合戦によって滅ぼされ、東北地方は鎌倉幕府の支配体制に組み込まれることとなった。本設問は、このような東北地方の政治史的展開を、戦乱と関わる現地の支配権力、源氏の武士名などとともに、正確かつ具体的に理解できているかどうかを問うた。

（Ⅲ）

本設問は、天保改革にあたった幕府が当時の対外的危機をどのようにとらえ、またそれをふまえてどのような具体的政策をとったのかについて、正確な理解がなされているのか否かをみたものである。天保改革以前にとられていた異国船打払令は、外国との緊張関係を深刻化させていた。また、アヘン戦争の情報も日本に達していた。幕府は異国船打払令を撤回して薪水給与令を出すとともに、大名を動員して江戸湾防備を強化した。上知令も、海防を意識したものと考えられる。また、自らの軍事力の増強も図った。天保改革が実施されたのは天保 12 年（1841）から同 14 年にかけての短い期間であるが、答案では、この時期に実施されたものと、それ以外の時期に実施されたものの区別ができていないものが目立った。天保改革期の対外政策と、その背景についての正確な理解が望まれる。

（Ⅳ）

昭和恐慌は深刻な農業恐慌をともなった。本設問は、この農業恐慌に対する理解の程度を問うたものである。昭和恐慌についての概要を説明するのではなく、問題文にある「農業恐慌が発生した要因」「当時の農村の状況」「政府による対策」に満遍なく触れることが肝要である。教科書によっては、「政府による対策」のみ別の項目で扱っているためか、的外れの対策を挙げているものが目立った。また、第一次世界大戦後に連続する恐慌を概説的にまとめた答案もかなりあった。1930 年代に関する設問であったために、答案により解答の出来具合に大きな差があった点も指摘しておきたい。

2. 世界史問題

【出題の意図】

全体のねらい

「主体的・対話的で深い学び」を目ざす教育改革と、その成果を評価する入試改革の方向性を反映した出題を試みた。そこでは、「教科書に出ている」知識・理解だけを、「幅広く問う」という美名のもとに独立したバラバラな小問群によって問うという、実力測定効果の低い旧来の方法を離れ、教科書に書かれていないテーマや資料について教科書レベルの知識・考え方で読み解くことを要求すべく、学生による大学での研究をテーマとした単一の大問（互いに関連しあった一連の小問を含む）を出題した。教科書外の事項を考察する手がかりの提示や、文学部・外国語学部の入学者にふさわしい高度な文章読解力を試す目的で、意図的に長大な資料や問題文を連ねた点（長文論述の要求も当然だが、問いの連鎖を重視したため短答・記号選択式の問題も例年より増やした）、また高校新学習指導要領が重視する国民国家とナショナリズムを全体のテーマとした点なども、今回の出題の特徴である。

問1～問4

ベトナムの独立・統一を指導したホー・チ・ミンは社会主義者だったか民族主義者だったかという論争について、かれの生涯に関する年表と独立宣言、遺言などの資料から考察させる問題群である。問1・2で背景となる社会主義や帝国主義と民族独立運動に関連した知識を確認したうえで、問3・4で本人の思想を取り上げるが、それらは単純な事実知識の問いではなく、問いの文脈と資料を正確に読み取った上で、何を根拠にどう蓋然性が高い理解をするかを問うている。資本主義国での社会主義運動の発展やナショナルな「一国社会主義」などの「教科書知識」に加え、社会主義が帝国主義やファシズムと闘うために広範な提携戦略をとったことを問いの中で詳しく紹介している。したがって問4では、ホーが資本主義国で学んだことや、中国国民党や連合国との協力に関わったこと以外の根拠を、青年時代から遺言までの長いスパンで探し出すことが求められている。

問5

帝国とナショナリズムの対立についてのより広い理解を問う出題である。ホー・チ・ミンのそれと同様に、社会契約型・領域型でなく「民族」の権利を強調するタイプのナショナリズムが発展した中欧・東欧の19世紀について、これも長いスパンで巨視的に論述することを求めた。個々の「暗記事項」を書き並べるなという要求は、以前にも出題例がある。知識・理解の面では、中欧・東欧（南欧ではない）が指す範囲、オスマン帝国が「ヨーロッパ史の一員」であったことなどがカギになる。

問6

ベトナム史をめぐる評価の対立について、19世紀からベトナム戦争までの歴史的背景の理解をもとに推論する能力を問うた。孤立した多肢選択式の小問だが、選択肢に書かれた評価が実在するかどうかを知らなくても、関連する教科書知識をもとに研究上の仮説としての蓋然性の有無を判断できるような出題をした点が、事実知識ばかり問わない入試に向け

た、新しい工夫である。

問 7

国家建設の運動やそのリーダーと歴史・宗教との関わりをテーマに、複数の候補から受験生が選んで論述するよう求める問題で、自分が選択した対象について適切な知識を動員し論述を組み立てる能力を評価しようとしている。例示された宗教は3つだが国家は4つあり、「一つの国を選んで」論述するよう求めているのは、今回の問題全体のテーマが国家だからで、同じ宗教や思想でも、国家ごとに違った見方がありうることを示そうとしている。なお問題文を素直に読めば、選んだ国に関係する過去の歴史を書けばよく、例示された現代の運動を詳述する必要はないのだが、両者をつなぐ論述（イスラエルの例なら中世～近代のユダヤ人の動きなど）も含めて、論の構成自体の幅を広く想定して出題したものである。問4や問6とあわせて、受験生が大学での歴史研究は「唯一絶対の正解を求める」ものではないというメッセージを読み取ることが期待されている。

3. 地理問題

【出題の意図】

(I)

日本に多く存在する離島について、多面的に問いかけたものである。提示されたリード文の中にも解答のヒントがあるが、それぞれの問いかけに対して、マルチな視点に基づいた解答が期待される設問である。

問 1

国権および経済活動の及ぶ国家の領域を主張するために、国境に立地する離島は重要であり、それらは有人の場合が望ましいがゆえに、住民等の居住の維持のために国家的方策が講じられる。居住や交通の促進のための補助金の投入や生活環境の整備、生業・産業の維持など、様々な面での施策が考えられる。場合により、国防のための自衛隊の駐留が必要となる。これらの施策には多大な予算が必要になるとともに、国境を接する隣国との紛争の可能性も視野に入れておかなければならない。政治・経済・社会などの様々な面から言及するかたちでの解答が望まれる。

問 2

離島地域ではその隔絶性のゆえに、他地域とは異なる自然環境や歴史・文化が残されている。自然の面では地形だけでなく、植物相・動物相に関して希少な生物種などが残されている場合がある。歴史・文化的な遺物・遺跡、民俗・風習・行事なども同様である。これらは保全されるべきであり、同時に観光資源などとしての利活用も期待されるが、保全・保護と利活用とのバランスが重要である。複数の地理教科書がジオパークを取り扱っており、通常の学習により解答は可能である。

問 3

本問は、地誌の面から、大規模人口を抱える島国における自然環境・産業・人口などの特色を問うたものである。設問で挙げられている国々は、東西ないし南北などに国土・領海が広がっているために、多様な気候のもとでの環境・風土・文化を有している。農林業の面で豊かな生産性・多様性を示し、人口が稠密であり、とくに平坦地では農業生産性が比較的高く、時代の違いはあれ農村部から都市部への大規模な人口移動が見られた。様々な観光資源も存在する一方で、造山帯やトラフの周辺に位置することから、規模の大きな地震や津波の被害にも遭ってきた。ここでは様々な項目について、三つの大規模島嶼国家の共通性に着目することがキーとなる。

(II)

世界の農業と穀物貿易について、とくに三大穀物や大豆など、世界で大規模に生産・流通・消費される作物群をめぐる現状と課題について問うたものである。グラフを読む基本的な力のほか、大規模な穀物貿易に伴う諸問題に関する知識と理解力を試すことを主眼としている。とくに問3においてはバイオメジャーによる世界の環境や小規模農業への影響を多角的に考察・理解する思考力を求めた。

問1

米・小麦・トウモロコシの生産・流通・消費の特徴について、生産量と1人当たり供給量の関係を示す散布図から問うたものである。いずれもグラフに表れた特徴を素直に読み取ることによって容易に把握することが可能である。

問2

大豆の生産と利用および貿易について、20世紀後半以降の変化を中心に問うたものである。グラフからは大豆の生産量と中国の大豆輸入量がともに増加してきたことが読み取られるが、解答するためには土地開発によってブラジル・アルゼンチンなどで生産量が急増したことや、従来は油料作物としての利用が主なものだったが、これにくわえて大豆粕が配合飼料として大規模に使用されることになったことなどの背景的知識が必要となる。

問3

バイオメジャーによるF1品種の世界農業への浸透に伴う負の影響、とりわけ小規模農業や環境に与える影響について問うたものである。取り上げることのできる問題は多岐にわたるが、バイオメジャーの種子支配による在来農家・家族農業に対する権利の侵害や、作物の遺伝的多様性の喪失、遺伝子組み換え作物の普及にともなう生態系の攪乱、農薬の大量投入による健康被害などの問題が挙げられよう。いずれにせよ、単に言葉を羅列するだけではなく、問題の因果を正しく説明する理解力と文章力をも必要とする。